

宮本昭子先生、ご紹介ありがとうございます。
現在これと言って仕事を持たない者が書いてよいものかと、思いましたが、今日までの自分を振り返ってみました。

大切な出会い

昭和54年、私は勤務していた病院を辞め、結婚、青森市に移り住むことになった。しばらくボーッとしていたが、幸いなことに、上司の紹介で、新道幸恵先生の下で働けることになった。第2のスタートが、弘前大学医療短大専攻科で始まった。

5年程の臨床経験だけで、果してやっていけるだろうか。いざとなると不安で一杯になった。その気持ちを打ちあけると、先生は、涼しい顔で私にこう言われた。

「伊藤さん、あなたの価値はミセスだということです。結婚している、妊娠、分娩、育児を実践できるということに価値があります」

フッと肩の力が抜けた。気負わなくてもいいんだ、一女性として、ありのままの姿で、学生と接してみよう。そう思うと、とても楽になっていた。こうして1年後には、学生たちにとって最も身近な妊婦・母親のモデルとなった。

未熟な私を皆さんが暖かく迎え入れてくれ、公私共に助けて下さったので、私は学生を通じて仕事を続けることができた。3年間という短い間だったが、弘前での経験や出会いは本当に大切なものとなり、私の中に残った。

地域の活動をして

青森から3回目の夫の転勤先は、秋田市であった。思いを残して専攻科を辞めてから3年が過ぎていた。下の娘は3歳になり、少し余裕のできたちょうどその頃、宮本先生を介して、専攻科3期生の佐藤弘子さんから電話をもらった。「助産院(マタニティセンター)開業の手伝

りれ一随筆⁷⁶

福島県いわき市
伊藤かずみ

いをしてもらえないだろうか。子づれでいい、協力してもらいたい」私は、即、OKした。今の自分の立場にピッタリの仕事だと、直感したからだ。マタニティセンターでの仕事は実に魅力的で、やりたいことが山ほどあった。

センターには様々な経験を持った助産婦4人が集まり、力を合わせて妊・産・褥婦にぶつかると、必ず私たちも納得できる反応や手応えがあった。妊娠、分娩、産褥、育児を一貫して手助けすることのすばらしさは、かつて味わえなかったもので、私にとって大きな感動だった。私の2人の娘も、センターで分娩に立ち会う機会を得、この何物にも替えがたい経験は、後に私の仕事を理解し、子供ながら精一杯協力してくれることに繋がった。

マタニティセンターでの仕事をきっかけに、保健所の嘱託助産婦として、妊産褥婦・新生児の訪問指導を行なうことになり、さらに地域に出ることになった。ここでも、施設助産婦としては到底遭遇しないであろう人々に会うことになった。

一家で身を寄せていた知人宅で、たった1人で分娩をしてしまったKさん。そばにいたのは幼子だけ。妊娠中の診察は一度も受けていない。もっと衝撃であったのは、Kさんの存在がわかった経過だった。出生届が受理されない

その時、その時

養の手助け、時には育児のストレス解消にと、お母さんたちが集まった。我家はにぎやかになり、ベビー布団も大活躍だった。こんな調子で、私の存在が口コミで知られるようになっていった。責任が重く、負担に感ずる時もあったが、人と人の絆が深まり、信頼関係ができてくるのを実感でき、心豊かになった。

一時休業へ

これからこの仕事を自分の仕事として形を整えていきたい、潜在する仲間とも協力していきたい、などと考えていた矢先であった。また夫の転勤が決まったのである。大変なショック、単身赴任してもらおうか、いろいろ迷った。しかし、全て断念した。この仕事は、自分に余力と余裕がなければ、続けるのはとても困難なことがわかっていたので。今までおつき合いして来た人たちに事情を話し、心からお詫びし、本当に後髪を引かれる思いで秋田を後にした。

半年が過ぎた今も、時々秋田から電話が入る。「検診で小さいと言われて」「便が3日間出ないの」「アトピーがひどくなって」電話代も高いし、わざわざ秋田からと思うけれど、不安な気持ちを話して安心できる相手がいないのだ。もっと近ければ、行ってゆっくり聞いてあげられるのにと、少し心細げな電話の向こうに励ましの言葉をかけながら、「必要な時にいなくなってしまうて、ゴメンね」と心の中で詫びた。

* * *

いわきに来て何もせずに半年、宮本先生からのリレーは活動を促すメッセージかも知れない。自分自身に十分充電がすんだら、そのメッセージに応えたい、と思っている。次回は、大学病院に勤めて10年、ベテランとして活躍している、長南記志子さんにリレーします。節目にあるあなたの思いを聞かせて下さい。

● と言うのである。出産の立会人がいなかったために、Kさんの出産を裏付ける証拠等を添えて受理伺を法務局に提出し、それが認められなければ、生まれた子は籍に入れられない状況であった。保健所からその確認も含めた訪問の依頼を受けた時には、緊張したが、慎重にKさんを訪問、痕跡を確認し、状況を詳しく記録した書類を提出、やっと受理された。望みさえすれば、贅沢とも思われるお産もできる時代に、たった1人で出産を経験しなければならなかったKさんを思うと、今も胸が痛む。

● 保健所で要訪問となるケースは、他にも実に様々な問題を私たちに提起した。若年妊婦の訪問は、助産婦としても、娘を持つ母親としても考えさせられることが多かった。「私たちの役割は、『子供を育てる母親を育てる』こと」「やっぱり、母親が一番大事なの」と言う保健婦長や現場の声に強く共感した。

こうした保健所の仕事と併行して、フリーの助産婦として、ごく現代的な妊婦・お母さんたちとおつき合いも始まっていた。彼女たちは、自分だけに目を向けてくれる助産婦、ごく身近に存在し、面倒な手続きもいらず必要な時すぐに応じてくれる、そんな人を必要としていたのだと思う。夫婦で呼吸法の練習に来たり、産褥の一時期母児のケアに出向いたり、母乳栄